資 料

リニア時代に向けた
コンベンション施設・屋内体育施設に関する検討の
『基本的考え方』（素案）
に対する提案書

平成 30 年（2018 年）11 月 28 日

南信州アルプスフォーラム／特定非営利活動法人いいだ応援ネットイデア

◇ はじめに

私たちは、平成 27 年 12 月に提案書『リニア時代の中心市街地の役割と、これからのまちづくりとしての公民連携』を飯田市長にお渡ししました。これは、街の歴史・文化が重積し、市民活動が集まりやすい中心拠点にこそ、新文化会館立地がふさわしいと分析し、更にリニア時代の大交流時代に飯田らしい“おもてなし”を実現できる『まちなかＭＩＣＥ』を提案しました。魅力あふれる飯田市中心市街地（中心拠点）の将来を市民レベルで考え提案したものです。その後、平成 28 年春には旧市五地区まちづくり協議会から、上記提案書を基本とした新文化会館の中心拠点立地の要望書が提出されています。

私たちの考え方の基本は、『飯田市土地利用基本方針』に沿いながら、“飯田市の顔でもある中心拠点”⇔“個性あふれる地域拠点”⇔“リニア駅の広域交通拠点”それぞれの役割分担をはっきりさせ、100 年後の飯田市のまちづくりに対して責任を持って考え、行動していく事にあります。

さて、新聞報道等では進められてきたコンベンション施設の計画については南信州広域連合での検討過程で町村長より慎重論が出され、振出しに戻されたとして私たち市民は受け止めています。そして今回、南信州広域連合事務局より「リニア時代に向けたコンベンション施設・屋内体育施設に関する検討の『基本的な考え方』（素案）」が出され、市民に広く意見を求めたことは行政手法としても評価すべき進め方と理解しております。この後、単なる意見募集に終わらせず、きちんと市民と行政が手を取り合って、その必要性の検討から計画立案、予算、運営費等について、お互いが責任を持って考え、行動していく手法こそがリニア時代の飯田下伊那地域を築いていく礎になると考えています。リニア時代の、この地域の方向性の論議が深まっていない中で、施設づくりがまちづくりの目的にならないように、この地域に本当に必要なものを厳しく精査し、貴重な予算を振り向けていくことが求められます。

（以降は、コンベンション施設・屋内体育施設を通称として使われている『コンベンション・アリーナ』と表記します）

◇ 郊外型大型コンベンション施設考察

■ 三菱ＵＦＪリサーチ＆コンサルティングの報告書

この報告書が明らかにしていることは、飯田下伊那における郊外型大型コンベンション施設が運営的に不可能であることを客観的に述べています。

すなわち、無理して建設しても期待した利用は見込めず、維持費等によりこの地域の財政が疲弊してしまうということを暗示しています。私達独自の情報分析でも、特に九州新幹線沿線に存立する大型コンベンション施設は、いずれも運営に苦労し、多大なランニングコストに税を投入し続けています。

■ 同地域に２つのコンベンションホールが存在は不要

平成 31 年 1 月には飯田市が 20 億円の巨費を投じたコンベンション機能を有する「産業振興と人材育成の拠点」が旧飯田工業高等学校跡地に完成します。リニア新幹線駅から車で５分未満の場所にあり、更なるコンベンション施設の設置は過剰施設となることは明白である。飯田市は都市計画がないまま、「産業振興と人材育成の拠点」建設を進めたのか問われることになると考えます。

■ 1,000 人規模の会議には「まちなかＭＩＣＥ」を利用

コンベンション・アリーナ構想には 1,000 人規模の大型会議を想定する向きもある。この規模の会議は「産業振興と人材育成の拠点」のキャパシティでは難しい。しかし、三菱ＵＦＪリサーチ＆コンサルティングの報告書によれば、長野県における 1,000 人規模の会議は年 6 回程度であり、その必要性は極めて限定され、今後、飯田市で行われるようになっても件数は期待できません。

こうした 1,000 人規模の場合には、新・飯田文化会館を中心とした「まちなかＭＩＣＥ」が機能する。新文化会館だけでは無理な場合は、他の公共施設や民間施設を利用することで充分対応ができる（まちなかＭＩＣＥについては後述します）。

■ 「新たな街を作らない」のではなかったのか？

南アルプスを貫くリニア路線が決まりリニア飯田駅が出来ることになった当時、リニア新幹線駅の周辺には新たな街を作らないという市長方針の発言があった。しかし、本年 10 月 24 日シルクホテルで開催された長野県主催『伊那谷自治体会議』において、飯田市の説明の中で、スライド上のリニア駅周辺地図の中に赤斜線で建設候補地を示し、「コンベンション・アリーナ建設が予定されている」と公衆の面前で唐突に述べられた。三菱 UFJ コンサルの分析においても、郊外型大型コンベンション施設の建設は会議場に留まらず、飲食店、宿泊施設等が必要とされており、リニア駅周辺に新たな街が出来上がることになる。それが一つの建物内にあっても同じことであり、先の会議での説明は明らかに前記の市長発言を覆すことになるものだと考えます。

■ 経済の波及効果を考える必要

リニア新幹線駅周辺に郊外型大型コンベンション施設を作った場合、リニア新幹線の性格上、多くの参加者が日帰りはおろかトンボ返りになる事が明白である。リニア新幹線とコンベンション施設の２極をつなぐだけの考え方は、広範囲な連続性が欠如しており地域に対する経済効果をもたらすものではないと考えます。

■ コンベンション施設利用のトレンドを把握する必要

三菱 UFJ コンサルの分析には最近、実際の地域で起きている重要な視点が抜けている。少子高齢化、人口減少、地方経済の縮小等により、ビジネス的な大型コンベンション需要は減少しており、一方で、専門的な技術、経済、生産、医薬、さらには友人、ＰＴＡ、地域等のインフォーマルなコンベンション需要が増えている。

小規模でも質の高い飲食・宿泊と共に、２次会や３次会にも歩いて行けるような便利な立地のコンベンション施設が今後の主要なトレンドになっていくと予想される。従って、郊外型大型コンベンション施設はトレンドに逆行する施設となる。

◇ リニア時代に向けたコンベンション施設・屋内体育に関する検討の『基本的考え方』（素案）の内容についての意見

１．基本的なコンベンションとして行われる活動以外の、文化会館的な利用、公民館的な利用の発想が多く述べられている。

アリーナの空間でのクラッシック音楽は無理であり、文化会館としての基本的性能確保は出来ない。また、地域に根差した公民館活動が当地の特色であり、伝統文化や芸能の多くは神事によって地域で成り立っているものである。リニア時代には実際のフィールドに短時間に行けるようになり、人工的な施設で体験するのではなく、現地で体験できることが魅力であり、意味がある。

２．具体的な使い方・コンテンツも寄せ集め感があり、少子高齢化による地域文化継承が危うくなっている中山間地の活性化には何ら寄与しない。
地域の伝統文化や伝統芸能がこの地域の宝ならば、行政はその地域に取り組むべきであり、何でもかんでもコンベンション・アリーナに集めるべきではない。

３．本来のコンベンションは民間的な発想で行うべきである。

４．「基本的考えた方」（素案） Ｐ10「・飯田文化会館の建替えが予定されているが、その内容は、本施設を踏まえて検討される。（飯田市との情報共有・連携）」とあるが、本来の目的と用途が違う、文化会館、コンベンション、アリーナは、すべて分けて考えるべきである。中途半端にくっつけた施設こそ魅力がなく、そのような施設にリニア時代の来客を迎えることは出来ないと考えます。

施設があれば人々が集うという『施設ありき』の考え方ではなく、今後の検討を進めていただくことを強く望みます。

◇ リニア時代がもたらすものと施設のあり方

リニア新幹線がもたらすスーパー・メガリージョンとは、東京と名古屋、大阪が世界一の経済圏として地域的に一つになる大交流時代を言い、当地にも東京都飯田市、愛知県飯田市という感覚がもたらされることである。

したがって、施設が同一の機能なら、他地域と同一視され、比較されることになる。大都市と比べて予算が限られている飯田下伊那の施設は機能そのものでは東京や名古屋の施設に太刀打ちできないのが明白である。大都市の施設に機能では劣るとするならば、わたしたちは何を目指すべきなのか。その答えは飯田の身の丈に合い、飯田の文化風土を活かした観光と一体化した**「まちなかＭＩＣＥ」**の創造と構築にあります。観光資源が乏しいと言われる飯田下伊那地域だが、殺伐とした大都会から 40 分で来ることができる環境の中で、人情豊かなこの地域の特色を最大な武器として進めることができると考えます。

◇ まちなかＭＩＣＥ

＜ＭＩＣＥとは＞

ＭＩＣＥとは、Meeting（会議・研修・セミナー）、
Incentive tour（報奨・招待旅行）、
Convention または Conference（大会・学会・国際会議）、
Exhibition（展示会）
の頭文字をとった造語で、ビジネストラベルの一つの形態。

さらに、私達はＭＩＣＥの最重要ポイントは**『交流』**にあると考えています。

■ まちなかＭＩＣＥとは

大規模会議場（コンベンション）の施設は基本的にはどこでも同じである。会議場があり、それに付随するレストランや宿泊施設が用意されている。後は規模と立地条件がその差異となる。したがって、前述したように、その規模と利便性により、飯田下伊那の施設（郊外型大型コンベンションホール）はどんなにがんばっても東京や名古屋の施設に太刀打ちできない。

では、私たちはどこに着目すべきか。それは他の地域にはないもの、差別化できる要素をみるべきである。

考えるに地方都市において、飯田の中心市街地ほど整然とまたコンパクトに整備された街を見たことがない。そこには、会議場、宿泊施設、飲食店、駐車場、公共交通機関がすでに存在している。これらの利用を基本として、新しい取り組みも行いながら飯田市中心市街地全体をＭＩＣＥとして創り上げていくべきであり、これは大都市施設にはない飯田ならではの魅力的な機能となると考えます。

このように飯田市中心市街地全体をＭＩＣＥと捉える構想が、私たちの提案する「まちなかＭＩＣＥ」である。

■ まちなかＭＩＣＥの利点

（参加者）大会議⇒分科会⇒パーティ・懇親会⇒二次会（アフターMICE）⇒宿泊

（家族同行）←これからのトレンド

用意されたエクスカーション（飯田下伊那観光）⇒（懇親会家族参加）⇒宿泊

そもそもＭＩＣＥ（ビジネストラベル　新たな観光）の本質とは、上記のチャートで示した通り、本格的会議とその後の懇親会（アフターＭＩＣＥ）を通して、お互いを知り、友人となって、その交流から新たな技術や経済のイノベーションなどが生まれてくるきっかけを作ることである。

この交流の場所は、まず各方面から人々が集まりやすく、交流の連続性にあふれていること、次に文化や暮らしが集積し、人と人が出会う楽しみがあふれていることが重要である。こういう点から地域の中心拠点がふさわしく、飯田市では中心市街地以外考えられない。「まちなかＭＩＣＥ」は、飯田が長年培ってきたポテンシャルを大いに活用でき、かつ、他地域には真似のできない独自性を発揮することができる。従って、「まちなかＭＩＣＥ」の実現はリニア新幹線開通後の地域間競争に有利に働く大きなファクターとなると考えます。

■ まちなかＭＩＣＥに必要な施設としくみ（PPP,PFI を取り入れた官民の協働）

1. 新・飯田文化会館

新文化会館はまちなかＭＩＣＥの中心拠点となる。立地は各方面から人々が集まりやすい場所、たとえば飯田駅前付近が考えられる。メインホールでは 1,000 人規模のコンベンションも開催可能とし、中小のホールや会議室も併設して多目的な利用に対応する施設とする。

2. リニア新幹線駅と中心市街地を結ぶ専用線（道路）と交通機関

リニア新幹線駅と中心市街地を専用線（道路）で結び、公共交通機関（電車・モノレール・自動運転バス等）が定期的に往復する。

3. まちなかにある会議室、民間施設（ホテル、飲食店等）との連携

既存の施設、機能と連携し、連続する MICE 運営を民間に任す。

4. まちなかの空き空間（空き家、空き地）の利活用

ＭＩＣＥに空き空間を活用する。これは、地方都市の抱える問題に対する“まちづくり”のお手本となる。

5. 飯田下伊那各地の地域拠点との観光的連携。

◇ 中心拠点に立地する新文化会館

山・里・街の多様性に富む暮らしが、おじや経済といわれる多業種の産業を生み出し、また、暮らしの中から多様な民俗芸能、公民館活動に代表される深い学びが生まれ受け継がれてきた。こうした多様性を受け入れて、当地域の魅力として内外に発信する役割を担ってきたのは「街」である丘の上＝飯田市中心市街地（中心拠点）である。碁盤目の街並みが誕生して四百年余を経過し、今後も数百年、数千年と「街」はその役割を担っていく。一方、文化ホール（文化会館）は最も大切な施設で、飯田下伊那地域の活動が集結する文化の殿堂とならなければならない。その適地は、丘の上であり、中心市街地立地させなければならない。

◇ 最後に

この地域にとって、リニア時代は希望である一方、巨大な経済圏と情報圏に取り込まれる不安要素も抱えている。リニア時代のこの地域のあり方や、方向性の論議が煮詰まっていない中で、巨費をつぎ込む郊外大型施設計画が『施設づくりありき』で先行していくことは大きな問題である。さらには、その大型施設の建設コストと運営コストが負の遺産化し、リニア時代の大きな変化に対応していく予算も将来危うくなる事も心配される。

市民にとって本当に必要な投資を十分な論議を経て行うことは理解できる。その場合は、小さくても世界に胸を張って誇れるものを目指す投資であるべきであり、それでしか目指す『ちいさな世界都市』は実現しない。

この地に必要な施設とは、大規模な施設を前提とせず、「身の丈に合った」「居心地のよい」施設とし、真に地域に馴染んだ地域にふさわしい施設、地元から末永く愛される施設を目指すべきである。重厚長大な施設によって地域の将来にツケを廻すようなことは絶対に避けなければならない。

リニア時代の新施設

アリーナ中心の複合型

広域連合として文化会館は別に　考え方案「学び」の拠点

南信州広域連合議会は25日、飯田市内で定例会を開き、牧野光朗連合長（飯田市長）はリニア中央新幹線の開業時代を見据え、広域連合で整備を検討する新施設の具体的イメージとして「アリーナ機能を中心とした複合施設」とする考えを明らかにした。続く全員協議会で新施設の「基本的考え方」案も示し、「学びのベースキャンプ」(仮称)を目指すとした。(2面に関連記事)

さらなる議論や研究を通じて考え方を整理した上で、新年度の早い時期に検討委員会を立ち上げる。設置場所やスケジュールなど計画案は2019年度内にまとめたい方針。関連する市の飯田文化会館（高羽町）については「引き続き当地域の芸術・文化の拠点となる劇場型ホール」ととらえ、新施設とは別に市による建て替え検討を求める。

開会あいさつで牧野連合長は「当地域の強みである『学び』の土壌」を生かし、圏域内外の施設と連携して一体的に地域の課題に取り組もうという考え」と説明。吉川秋利議員の一般質問への答弁では「スポーツや芸術文化を学ぶ環境を充実させ、若者の誇りや自信、新たな価値の創造につなげたい」と語った。

「考え方」案の施設コンセプトでは「（県としても目指す）学びの県づくりの拠点となるような社会教育（スポーツ・文化・芸術・芸能）の拠点施設」＝「信州 学びのベースキャンプ」に位置付けた。アリーナの定義は「周囲を観客席で囲まれた多目的利用可能な平らな床面」としている。

「アリーナ機能を中心とした複合施設」の具体的イメージとして▽子どもや青少年がプロスポーツに触れ、各種スポーツを本格的に学べる拠点▽プロの指導者が訪れ、ワールドクラスを目指せる環境▽パラスポーツやシニアスポーツの一大拠点▽大規模スポーツ大会やコンサートの開催▽獅子舞や歌舞伎など民俗芸能の国内外発信―を例示した。

今後の施設検討に向けた論点では▽建設・運営の方式（公設民営、民設民営など）▽施設規模▽利用形態（興業主体や住民利用主体など）▽立地条件（必要面積、アクセスなど）の整理と候補地の絞り込み▽概算事業費と財源、開設目標時期―を挙げた。

産業振興と人材育成の拠点「エス・バード」（同市座光寺）や、市として建て替え検討を進める飯田文化会館、地域内外の施設などとの機能連携やすみ分けも重視していく。「考え方」について、住民向けの説明・意見交換の場も検討する。

同広域連合は昨年9月、検討当初のコンベンション（大型会議）・屋内体育施設の枠や既成概念にとらわれず、「暮らしの質の向上」や「価値の発信・創造」に寄与する施設の整備に向けた「考え方」の素案をまとめた。構成市町村からの意見提示や関係機関・団体との協議、先進地視察などを経て、今回の案を示した。

……

19年度予算など9件を可決

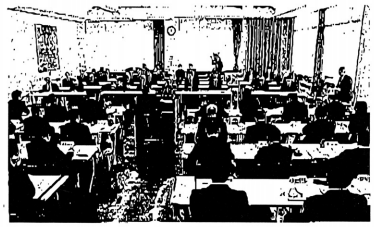
25日の南信州広域連合議会定例会では、各会計の本年度補正予算案や新年度予算案など計9件を可決した。2019年度の一般会計と、広域消防、稲葉クリーンセンター、振興基金の3特別会計の総額は36億9200万円余で前年度比1億4100万円（4・0%）増となっている。

19年度一般会計は総額14億4140万円。前年度比14・2%（1億7900万円）増で、障害者支援施設「阿南学園」（阿南町）の改築基金や「満蒙開拓平和記念館」（阿智村）の増築補助などを計上した。

飯田広域消防特別会計は21億1520万円で同5・2%減。35㍍級の消防はしご車1台のオーバーホール費や阿南消防署の指令車・ポンプ車購入費などを盛った。

ごみ焼却施設「稲葉クリーンセンター」（同市下久堤）の特別会計は1億2500万円余で同143・6%の増。事業売電が好調といい、年間収入見込み約8200万円（前年度当初比約3000万円増）のうち、6500万円を運転期間中のメンテナンスや起債償還など必要経費の財源として毎年度積み立てる。

残る余剰分は一般会計へ繰り出し、広域観光リニアプロジェクトの推進や南信州・飯田産業センターの試験場機器更新、看護師等確保対策修学資金貸付金などに充てる。



南信州広域連合議会の定例会

3-a) 自然史博物館と風越山のフィールドワーク
伊那谷の暮らしと自然の紹介
文化会館跡地に伊那谷の自然を学ぶ拠点立地
風越山全体を自然と神が宿るエリアに
日帰り登山の人気スポットに
(登山道の整備等)
2-e) オフィスビル、国の中枢機能のバックアップ
1-b) リニアトランジットと伊那谷の紹介
リニアとの接続するバスターミナル
自動運転バス、市内循環バス
伊那谷暮らし館
地元企業の参画
まちなかマルシェ
複合文化施設
(文化会館との連携)
飯田駅西口の新設
・低未利用地の活用
・人形劇のテイスト
・飯田駅西口との連携
・中心市街地『まちなかMICE』
のメイン施設
JR飯田駅
デッキ
イベント広場
立体駐車場
2-a) 新文化会館の飯田駅前立地
歴史街道
土蔵の活用
2-e) 事業所、企業の立地
1-d) 通り町AIパーキングアベニュー
2) まちなかMICE
新文化会館と結の広場を
メインとしたリニア時代の
まちなかコンベンションの展開
飯田らしい人情の交流
中央公園
宿泊
駐車場
飯田中央郵便局
大宮諏訪神社へ
山車、本屋台の復活
3-e) 福祉と暮らし環境の再整備
住みたくなる地域へ
福祉の充実
空き家の再利用
事業所の立地
1-a) リニア新駅との直結
上郷リニア駅に直結した専用新交通線
・新アリーナと中心市街地とのMICE連携
・新アリーナのアフター利用が出来る
・リニア新駅へ
・新アリーナへ
3-C) 学びの広場・タウンキャンパス
・小、中、高　一貫教育の拠点
・学校統廃合
・高校の移転
・高度教育の実現
・公共施設の移転
・移住、定住、二地域居住の教育不安解消
・地域拠点屋外教育との連携
2-b) さくら並木 緑の公園軸線
民間空間のユニークベニュー
コンベンションガーデン
屋内イベント広場
テントのある催事場
スポーツ健康センター
飯田市中央公民館
2-C) 結いの広場
飯田市の原点、公民館活動の中心拠点
人形時計塔
3-d) 寺町散策と歴史の町並み
・城下町の町並み
・伝統的町並みへのリノベーション
・空き家、空き地の活用
・福祉、暮らしの充実
・寺町巡りのまちなか観光
・一本サクラ巡り
2-d) Minimum base
裏界線露地の魅力
横丁展開
1-d) 通り町AIグリーンベルト
駐車場の再整備
2-b) 緑の公園軸線りんご並木
サービス付高齢者住宅
公共空間のユニークベニュー
市民に空間開放・まちなかMICE
飯田病院
1-d) 通り町AIグリーンベルト
・通り町を二車線化し、各方面一車線分をオープンパーキング化
と共に、緑あふれる緑道に整備。
・それにより『小さな拠点』運営の駐車場問題が解決
2-b) 緑の公園軸線（りんご並木　さくら並木）
・中心市街地の背骨
・駐車は通り町　緑の軸線は歩行者専用化
2-d) 集いの拠点　Minimum base
まちは人に会いに来る所・小さな拠点
・空き地を広場化+空き家リノベーション
・空き地を広場+広場を向く建築(新築)
・クリエーターインモール
・アーティストショップ
・やる気のある若者の参加　地元企業の参加
・街角図書館
・まちなかMICE
・商店街ホテル　まちなか居住
・中心市街地でパフォーマンス
・ストアーミックスによる各通りの個性演出
・様々なサードプレイス（第三の居場所）
週末シードルガーデン
まちなかマルシェ、ファーム
まちなかキッチン
飯田市役所
再開発1
再開発2
再開発3
1-C) 中心市街地への
新交通システムの導入と5G環境の導入
ビューポイント
3-f) 四季の広場と動物園
丘の上ビューポイントの活用
飯田商工会議所
宿泊
「人々が集い、つながり、夢が広がる
りんご並木の心が息づく結いのまち・いいだ」
1. 新しい中心市街地の創造（文化、伝統、暮らしを基に）
2. 中心市街地の将来像
1) リニア中央新幹線駅とのアクセスと交通利便性の確保
2) まちなかMICEと賑わいの創出
3) タウンキャンパス～学びのまち
4) 緑あふれる景観と最新の情報技術
20年後の賑わう中心市街地への市民提案 Ver-2.1
飯田合同庁舎
赤門
3-b) 市民活動による教育，文化創造広場
飯田図書館
追手町小学校の活用
図書館、美術博物館との連携
市民文化活動の拠点
歴史的な町並みの復活